

- ・名古屋大学 博士研究員
- ・氏名 加藤皓士

・統一テーマ 歴史

・題目 贈り定めとしての存在の歴史とは何か

存在の歴史。ハイデガー哲学を学んでいるひとからすると馴染みのある言葉だが、そうでないひとからすると異様に見える言葉であろう。存在とは基本的には彼岸に有るもの、時間的な影響を受けない永遠なるもの、神的な次元に属するものとして考えられているだろう。そのため歴史といった移ろいゆく時間的なものとは本来そぐわないもののように見える。しかしハイデガーは存在の歴史という。存在に歴史を認めることとなる。しかしそれはいったいどのような事態を指すのだろうか。

ハイデガーは上記のような図式そのものを、もしくはその図式の由来こそを問う。このような存在を「現前性 (Anwesenheit)」として考える形而上学的な思考法から、歴史 (運動) を開放することが『存在と時間』の重要な課題の一つであった。現前としての存在、そしてこの存在から理解された時間、それらよりも根源的な存在と時間へと遡行することが、ハイデガーにとって重要な問題であった。この発表ではこのような次元において、存在と歴史がどのように考えられるのかを解明するようにしたい。

しかし問いが巨大であるため、的を絞るようにしたい。一見すると先の問いと離れるようだが、「裂け目 (Riss)」と「言葉 (Sprache)」に注目してみたい。

ハイデガーは歴史を出来事として、ある種の突発時として考えている。それは何かが新しく始まることであり、従来のものからすると裂け目が入られるような事態を意味する。この裂け目から、新しい何かが到来することとなる。もしなにかしらの必然性があらかじめ存在しており、そこから世界と歴史が生じるのであれば、ほんとうの意味での世界と歴史はない。そこでは人間はあくまで傀儡に過ぎない。それらはただの仮象であるに過ぎないであろう。しかしハイデガーはこのように存在を理解をしない。裂け目 (深淵) から始まりが贈り定められると考えるのである。しかしこの裂け目はあくまでそれを覗き見る、もしくはそこへと至るような人間抜きには存在しない。もしくはそれをあらためて開示し、名前をつけるような人間抜きには存在しない。ハイデガーは未だ名前を持たない謎の次元を裂け目として考えるのである。始まりにおいて何かが裂ける。この裂け目を中心に存在の歴史は動くこととなる。裂け目が由来であり将来として考えられており、これを中心に歴史は回る。

この裂け目から言葉がもたらされる。ハイデガーの言語理解はかなり独特であるのだが、さしあたり言葉は道であり、至らしめるもの、運ぶものとして考えられている。それは我々を存在へと運び入れるようなものであり、また存在を我々へと運び込むものである。このような言葉が我々を裂け目である深淵へと手招きする。ハイデガーは運命について語るのだが、言葉は我々を拉し去るような運命として考えられており、それは裂け目からとどろき、裂け目へと至るよう促す。そしてこの裂け目は、人間がそこへと至ることを通じて、それに名前が与えられるようなものなのである。言葉は道であり、しかもその道をたどることを通じてのみ、目的地が明るみになるような道である。存在の歴史とはこのような道として考えられる。

存在の歴史は運命であり贈り定めである。しかしそれは極めて激しい痛みを伴った命がけの跳躍の中で輝くのであり、そこには人間の何かしらの働きかけが必要である。あらかじめ一つの必然が支配しているのではなく、その必然性そのものをあらためて作り出すような人間の働きかけが存在の歴史の真理を形作る。そしてこのような存在の真理を全うさせるものとして、人間もまたその存在を得る。後期ハイデガーは思索と詩作を考え抜くのだが、このような人間と存在の映しあう関係が考えられているはずである。

極めて理解が困難な次元であるが、この次元について少しでも光を当てるようにしたい。そのため発表それ自体がある運動をもたらす必要がある。そのさい裂け目を与えて、新たな言葉を送り届けて、そこへと至らしめることが求められる。ハイデガーは解明を場所を究明することであるというが、それは事柄がそこから生じる裂け目へと至らしめることであり、そこへと至らしめる通路を作り出すことであるはずだ。及ばずながら、このような出来事を反復すること、それをあらしめることこそを課題としたい。そのためにも裂け目と言葉を考えることを通じて、そうするようにしたい。